

勝鹿の真間の娘子を詠む歌一首 并せて短歌

一八〇七番

鶏が鳴く 東の国に 古に ありけることと

今までに 絶えず言ひける 勝鹿の 真間の

手児名が 麻衣に 青衿着け ひたさ麻を 裳に

は織り着て 髪だにも 搔きは梳らず 杵をだに

はかず行けども 錦綾の 中に包める 斎ひ児

も 妹にしかめや 望月の 足れる面わに 花の

ごと 笑みて立てれば 夏虫の 火に入るがごと

湊入りに 舟漕ぐごとく 行きかぐれ 人の言ふ

時 いくばくも 生けらじものを 何すとか 身

をたな知りて 波の音 さわく湊の 奥つ城に

妹が臥やせる 遠き代に ありけることを 昨日

しも 見けむがごとく 思ほゆるかも

反歌

一八〇八番

勝鹿の 真間の井見れば 立ち平し 水汲ましけ

む 手児名し思ほゆ